

たのしい観光地 第9回 中丸謙一朗 (コラムニスト)

山あいの、極楽浄土に行ってみる

昔から、人は死後の世界を思い、生き続けている。境内に浄土の世界を表した浄瑠璃寺に立ち寄り生を感じる。



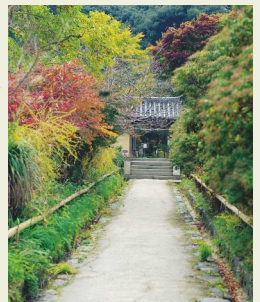
特別名勝・史跡、浄瑠璃寺庭園で「極楽浄土」を感じる。

ああ「この世は天国」だの、「地獄を見た」だの、人は何かという死後の世界を話題に出す。この世に出て聞なしの若いうちほとんども、人間も中年期を過ぎると、「あの世」のことが気になる。あまり口に出したくはないが、家族団らんや幸福が恋しい季節になると、自らそっちの方面へと出かけてしまう人さえもいる。人は、そして曰

本人は、ずっと昔から、死後の世界のことを思い続けている。人は死後を不安視するあまり、そこに「極楽浄土」を据えたり、しっかり己の時間を生きてささいれば、行き着く先は「極めて心地いい清らかな場所」、そんな行末が待っていると言いつたのである。京都府の山あいにある浄瑠璃

寺は、極楽浄土の庭で有名である。わたしは折りに触れ、この浄瑠璃寺を訪れる。けっして行きやすい場所ではない。だが、京都や奈良に用事がある際には、クルマをチャーターしてまでも、必ずこの寺を訪れる。寺に着くと、足早に庭を見に行き、一度深呼吸をし、全体を眺め回す。そして、20分もいるかないかです、この場所を後にする。それはまるで、おばあちゃんのうちに、近くに来たから顔を出した、思春期の男子学生みたいな感覚だ。ろくな挨拶もせず、ただ、出されたお茶とひからびたせんべいを食べながら、おばあちゃんの話ニコリともせずに聞く。そして、お茶を飲み終わるとおもむろに立ち上がり、「おや、もう帰るのかい?」「また、来るわ」なんて会話を、恥ずかしそうに交わし、

さっさと家路につく。帰りながら、「あれ?なんで俺、おばあちゃんち寄ったんだろう」「なんて、心のなかで不思議に思う。わたしの浄瑠璃寺詣では、言うなれば、こんな感じなのである。浄瑠璃寺は平安時代に建立された寺だ。中央には宝池。池の東側には三重塔が建てられ、薬師如来像が安置されている。これが東の本尊である。池の岸には南側を向いて灌頂堂があり、すべての生命の根源である大日如来が安置されている(通常は非公開)。西側には、われわれの未来を待ち受ける阿弥陀如来像(九体)が安置された、阿弥陀堂がある。浄瑠璃寺の伽藍配置は、平安時代末、藤原期に人の心を捉えた「浄土思想」が絵解きのように残されている。薬師如来によってこの世に送り出されたわれわれは、仏の教えに従って生きることにより、阿弥陀如来の待つ西方浄土に往生する。浄瑠璃寺の庭に立ち、見渡す景色に感ずる極楽浄土への思い。この静謐な空間は、過去世、現世、未来世と、世界の深遠なる成り立ちを静かに物語る。作家の堀辰雄は、随筆「浄瑠璃寺の春」(大和路・信濃路に収録)のなかで、小さな山門



山あいに現れる小さな山門。

から浄瑠璃寺の内部を覗いた時の、ハッとさせられたような驚きを綴っている。わたしも、はじめてこの寺を訪れた時には、なんだかちょっと怖いような、そんな「ハッとさせられ」る驚きを覚えた。時に場所は人によって支配される。支配する、俗な言い方をすれば「仕切っている」人が違っていると、その地の空気は変わる。神様であれ、おばあちゃんであれ、仕切っている人が違えば、自分のテリトリーとは違い、微妙な空気のゆらぎを感じる。浄土思想や来世への思い。それはそう大層なことではない。わたしにはさう感じる。誰も見たことのないのだから、そんなに難しいことを考えなくてもいい。そこにいて、けっし



浄瑠璃寺 京都府木津川市加茂西小札場40 創建は1047年(永承2)。真言律宗の寺院。開基は義明上人。本尊は阿弥陀如来(九体)と薬師如来。九体寺とも呼ばれている。近鉄奈良、JR奈良からバスで約25分ほどかかる。庭園入場は無料。

て居心地がよくなっていかまわらないのだ。ふらっと行ってふらっと顔を出し、来るべき死後や、人間の行き着く先を、ちょっとだけ感じる。以前、「観光とは、心の光を観に行くこと」という、ある僧の言葉を紹介した。とにかく極楽浄土に行ってみる。死を思うことだっただのしい。死を感じに行く観光が「生」を生き生きと蘇らせる。これこそまさに、先達からわたしたちに託された「たのしい観光地」なのだ。

中丸謙一朗 (なかもるけんいちろう)

コラムニスト。1963年生。横浜市出身。『POPEYE』『BRUTUS』『SOTOKOTO』誌でエディターを務めた後、独立。フリー編集者として、雑誌の創刊や書籍の編集に関わる。現在は、新聞、雑誌等に、昭和の風俗や日本の観光に関するコラムを寄稿している。主な著書に『ロックンロール・ダイエット』(中央公論新社、扶桑社文庫)、『車輪の上』(柘出版社)、『大物講座』(講談社)など。東北泉と山口百恵が最近の定番。日本民俗学会会員。